静かに背中を押されて

原燃輸送株式会社
（名古屋大学仁科研究室１９８６年修了生）

伊藤　大一郎

仁科先生にとっては全くの不肖の教え子の私とは大したエピソードもなく、寄稿させて頂く立場にはないと思いましたが、改めて振り返ってみると先生には折に触れて背中を押されてきたことに思い当たり、感謝を込めて一言述べさせて頂きます。

大学時代アイスホッケー部の部室に入り浸っていた私にとっては 4 年生の研究室の選択時には何の考えもなく、（大変失礼ながら）単に「第一」講座という名前が良さそう（自分の名前にも似ているし）ということで選ばせて頂いた気がします。そんなことなので、当然ながら仁科先生には「ラマーシュを読みなさい」と何度言われたのか分かりませんが、先生の人柄で研究室の居心地はよく、いつの間にか布団を持ち込んでチキンラーメンを夜食に研究室に入り浸っていました。残念ながら、何のために泊まり込んでいたのかは憶えていませんが、お陰で会社に入ってどんなに忙しくても、これで給料が貰えるとは有り難いと思ったものです。

会社では、「仁科研究室」の卒業生というだけで過大評価されて苦労させられた気もしますが、研究室の後輩というだけで他社や研究機関の優秀な先輩に何かと助けられ、先生の偉大さが少しは理解できました。また、先生の国際的な雰囲気に影響を受けていたこともあってか、国際会議や海外の仕事にも自然と携わっていました。これまでの仕事を思い出すと先生に静かに背中を押されていたことが今となって分かってきました。とは言え、海外の仕事の度に「英語を勉強しなさい」ともう一つ先生からいつも言われていたことが思い出され、本当に不肖の教え子だったことを思い知らされていました。

卒業後には研究室に立ち寄ることもほとんどありませんでしたが、福島事故を含めて折に触れて先生の積極的な情報発信を拝見する度に、原子力に対する真摯な姿勢を改めて教えられ、自分の背筋が伸びる気がしました。先生は原子力業界や多くの関係者に大きな影響を与えられてきましたが、今回私のような者の中にも先生の足跡がしっかりと刻まれていることが感じられる貴重な機会を頂きました。何より、原子力学会の活動に長く関与させて頂いたお陰でこのような機会を頂けたことも結局先生のお陰と感じました。先生を見習って、何事にも真摯な姿勢を忘れないようにしたいと思います。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（2026 年 3 月 31 日）